

## ムルク・ラージ・アーナンドの三部作について その3

### —農民と共に歩む「革命」運動—

小西真弓

ムルク・ラージ・アーナンド (Mulik Raj Anand) の三部作の最終作『剣と鎌』 (*The Sword and the Sickie*, 1942年) は、西部戦線でドイツ軍の捕虜となった主人公ラーが、帰国後に左翼分子や「目覚め始めた」農民と共に「革命」運動に立ち上がる物語である。かつてイギリス本国に憧れ、西部戦線で活躍した彼が、左翼化して急進的な活動に献身するようになるのは、報償もなく除隊を命じたイギリス当局の措置に反感を覚えたばかりではなく、戦後の農村の惨状を目の当たりにして、社会・政治改革の必要性に目覚めた故である。この小説にはガンディーやネルーばかりではなく、共産主義者のM.N. ロイや彼を支援したカラカンカ村の領主一族のプラジェシュ・シンを連想させる人物などが登場し、各々の言動が「革命家」としてのラーの精神的な成長を促す。物語は、実際に1920年頃に急進化した連合州の農民運動を背景にしているが、あまりに多くの人物の言動やエピソードが挿入されている故か、あるいは最終的にリーダーを失った農民運動が失敗するためか、この小説を「芸術的な失敗作」とか「核心まで混乱している作品」<sup>1)</sup>と評する批評家もある。しかし、『剣と鎌』が執筆されたのが、1930年代——インドが独立する前の混乱期——であったことを考慮すれば、将来の展望が定かではない物語の顛末も、小説家あるいは社会思想家としての作者の力量の問題ではなく、様々な主義・主張が飛び交ったインド独立運動期の時代精神の反映と言えよう。また、三部作を一連の「教養小説」として捉えれば、イギリス式教育を受けた主人公が西部戦線を体験し、戦後に共産主義的なナショナリストの影響を受けて「革命」を目指すというプロットの展開には、1920年代から30年代の作者自身の精神の軌跡が投影されているように思われる。イギリスで反英独立運動に直接関わらなかったとはいえ、アーナンドにとって帝国政府の批判に繋がる物語を出版することは、イギリスの読者の不興を買い、文壇から追われる危険性もあった。それを覚悟で作者はこの作品を通して、インドの「革命」に必要なものは、国民会議派の民族独立運動ばかりではなく、小作農をはじめとする無産者階級の政治・社会的な覚醒と連帯であることを訴えている。

キーワード：ムルク・ラージ・アーナンド 『剣と鎌』 (*The Sword and the Sickie*)

大戦間のインド農民 (キサン) 運動

\* テキストには、Mulik Raj Anand, *The Sword and the Sickie* (London: Johnathan Caper, 1942) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

## 序

サロス・コワスジーによれば、『剣と鎌』の舞台がパンジャブから連合州 (United Province, 現在のウッタル・プラデーシュ州) へ移されているのは、主人公ラルーとマヤが駆け落ちするプロットの展開と、ラルーが関与する農民運動がプラタブガルやアラハバード、ラエ・バレイリなどで盛り上がったという歴史的事実を配慮した故であるという。<sup>2)</sup> 駆け落ち問題はさておき、実際にインドの農民問題に関心を抱いた作者アーナンドは、1938年にカラカンカルのカンワル・ブラジェシュ・シン (Kanwar Brajesh Singh, ?-1966) のもとに滞在したり、<sup>3)</sup> アラハバード出身で当地の農民活動に言及したジャワハルラル・ネルーの伝記を読んだ。<sup>4)</sup> そのような体験を基に『剣と鎌』が執筆されたことは、多くの登場人物が実在の人物をモデルにしていることや、物語に挿入されたエピソードがネルーが見聞した農民運動と符合することからも明らかである。確かに、アーナンド自身は、農家の出身ではなく、執筆当時にはヨーロッパに滞在していた。そのためか連合州の農民運動の描き方に迫真性が欠けるというような批判もある。とはいえ、彼の母親の実家がパンジャブ州の農家であり、幼い頃からそこに出入りして一族の窮状を見聞した彼にとって、農民問題は決して他人事ではなかった。彼には、ブルジョワ中心主義で社会改革よりも独立を勝ち取ることに熱心だった国民会議派とは異なり、耕作地を失って路頭に迷う農民を救うことが先決問題だと思われた。そのために、物語の中では、ガンディーやネルーをはじめとする国民会議派のメンバーの主義・主張ではなく、虐げられた小作人たちの抵抗運動と彼らに組する「同志」たちの活躍が浮き彫りにされている。なるほど三部作の前作『村』や『黒い海を渡って』と比較すると、主義主張や本拠地が異なる多くの人物が登場する『剣と鎌』は、全体的にはまとまりがないような印象も与える。しかし、それはこの小説が「インドの生活の細密画」とも評されるように、<sup>5)</sup> 独立前のインドの複雑な様相をありのままに描いているためでもある。本稿では主人公の体験を中心に物語を紹介し、作者の農民を巻き込んだ「革命」運動とナショナリズムに対する見解を考察してみたい。

## I

西部戦線で負傷してドイツ兵に捕われ、数年間の捕虜生活を送ったラルーは終戦によって釈放され、イギリス本国を経てインドへ帰るためにボンベイから三等列車に乗り込む。その

2) Saros Cowasjee, *So Many Freedoms: A Study of the Major Fiction of Mulk Raj Anand* (Delhi: Oxford UP, 1977) 114-15.

3) カンワル・ブラジェシュ・シンは、カラカンカルの領主の子息で、スターリンの娘、スヴェトラナ・アリエター (Svetlana Alliluyeva) と結婚したことで有名な共産主義者を自称する政治家である。『剣と鎌』に登場する Kunwar Rampal Singh (通称 the Count) は彼をモデルにしたと言われる。Svetlana Alliluyeva, *Only One Year* (New York: Harper & Row, 1969) 16-89, Cowasjee, *op. cit.*, 115 参照。

4) Mulk Raj Anand, "Anglo-Indian Literature" in *Life and Letters To-Day*, Vol. 15, No. 5 (Autumn 1936) 185-87.

5) Edwin Muir, quoted in Shaileshwar Sati Prasad, *The Injured and the Insulted: Untouchables, Coolies and Peasants in the Novels of Mulk Raj Anand* (Patna: Janaki Prakashan, 1997) 189.

車中で乗客が、キラファート運動やガンディーの教えを話題にしたり、ダイアー将軍が指揮したジャリワラーバグ事件を批判することに驚き、自分がインドを離れていた間に社会情勢が変化したことを感じる。戦前は、三等列車のインド人乗客の話題と言えば、野良仕事や巡礼体験などであり、広い視野に立った政治・社会に関するものではなかった。ラー自身は、ドイツでの収容所暮らしの中で、ある程度までは祖国や世界の動向を伝え聞き、バルカト・ウッラー (Barkat Ullah, 1854~1927年) をはじめとする革命運動家にも出会ったが、ナショナリズムに目覚めることはなかった。時には、西部戦線のトラウマに苦しめられるが、彼はセポイとして命がけで戦えば、耕作地を授かるという徴兵募集のスローガンが忘れられず、家族のもとへ帰る前に帰還兵としてラホールにある所属連隊の駐屯地へ向かう。そこで、唯一の昔馴染みのセポイで下士官 (Jemadar) に昇進したクシ・ラムから再会を喜ばれるが、彼から捕虜になったセポイに対する「新しい命令」を知らされ、年金付きで除隊することを勧められる。それでもあと数年も軍務に耐えれば、「耕作地」が与えられることを期待したラーは、<sup>6)</sup> クシ・ラムの案内で上官のピーコック大佐と面会する。意外にも大佐は彼の長い捕虜生活を労わるどころか、ドイツでインド独立を唱えるバルカト・ウッラーや、ピライ (Chempakaraman Pillai, 1891~1934年)、チャトパディヤ (Virendranath Chattopadhyaya, 1880~1937年)、マヘンドラ・プラタプ (Mahendra Pratap, 1886~1979年) の話を聞いて影響を受けたという理由で、彼に僅かな年金付きで退役し、村へ帰って「良き農夫になるように」命じる。大佐から「彼らの危険な言葉を聞かざるを得なかった」と温情を示されるものの、その命令は5年間の苦難をしのいだラーには衝撃的で「各々の兵士に約束した一片の土地も功績を称えるメダルもなしにか」と叫びたくなる苛酷なものであった。多くの退役軍人が灌漑によって開発された耕作地と十分な年金をもらっているのに、若い自分が軍務へ復帰できないのは、納得できなかった。立身出世の夢を砕かれた彼は、「オフィスにある総てのものを粉碎したい」気持ちに駆られるが、大佐と握手をして命令に従うことしかできなかった：

彼はイギリス政府のために戦ったが、一人の兵士としては、何の権利もないことを意識していた。しかし本能的に報酬を期待していた。フランドルの塹壕には何ヶ月もいたし、捕虜になってドイツでは道路作りの囚人仲間と交じって働かされたから、イギリスのお偉方が自分に対して個人的には同情を寄せ、座るように椅子を差し出し、どんな気分だったかと尋ね、ワイン一本を飲むようにすすめ、タバコを何本か吸うように提供してくれるだろうと信じてた。また自分が連隊の中で数少ない教育のあるセポイの一人であることを考慮して、胸には勲章をつけ、歩兵軍曹に昇進したと発表してくれるだろうと確信していた。ピーコック大佐は、自分には親切だった。しかし彼の抑揚のない声の調子には腹が立ったし、彼の狡猾で異端審問のような声の口調は、その握手の暖かさとは裏腹のものだった。(26)

6) イギリス軍当局は、インドの大反乱 (1857年) 以降、退役後に「耕作地」を授けることを宣伝して、パンジャブ北部の「戦士民族」に入隊を促した。政府が当地で熱心に灌漑に取り組んだのは、退役軍人を灌漑入植地 (Canal Colony) に住まわせて農業に従事させる意図からでもあった。実際に入植地の3分の1は、退役軍人に割り当てられたが、ラーのような貧窮した小農の子弟にとって、その「耕作地」は魅力的であったと言われる。Christina Susan VanKoski, *The Indian Ex-Soldier from the Eve of the First World War to Independence and Partition: A Study of Provisions for Ex-Soldier and Ex-Soldiers' Role in Indian National Life* (Ann Arbor, MI: UMI, 1996) 165-189 参照。

戦時中に、北米やドイツなどで、ガダル党員などによる反英独立運動が高揚したことを考慮すると、ララーのように英語に堪能な収容所帰りのセポイは、当局にとって危険分子に感じられた。実際にガダル党員にはパンジャブ出身の退役軍人やシーク教徒の移民が多く、彼らはインドの故郷の活動家と連絡を取り合っており、イギリス帝国政府を打倒する機会をねらっていた。イギリス政府は、1915年にガダル党員の一部がチャドパディヤとドイツ政府の協力を得て、ベルリンにインド独立委員会 (Indian Independence Committee) を設立したことに脅威を感じていた。<sup>7)</sup> それ故、ピーコック大佐がバルカト・ウッラーの話聞いたララーが危険思想に染まり、「耳にした大量の内容を忘れなければならない」(25) との口実で除隊を命じるのも苦肉の策だったと思われる。しかし、イギリスびいきで反英独立運動に加担しなかったララーにしてみれば、それは正にイギリス政府による裏切り行為に感じられた。帰郷して「良き農夫になるように」と言われても、農家の三男坊の彼には、報償として土地が与えられなければ耕す田畑がなかった。怒って年金や旅費をもらう手続きをしなかった彼は、長らく音信不通の故郷に錦を飾ることなく帰るのも気がひけた。しかし他に行くあてもない彼は、思い切って故郷へ足を向けるが、道中のマナハバードで路頭に迷う人々の悲惨な光景を目の当たりにして、政府の裏切り行為に苦しめられるのは、自分一人だけではなくインド社会全体であることを悟る。

## II

5年ぶりに故郷に帰ったララーは、戦争による特需によって農民の暮らしが良くなるどころか、戦前よりも彼らがより貧困化している事態に衝撃を受ける。確かに、故郷のナンドブルの村とマナハバードの町を繋ぐ馬車がトラックに変わったように、戦争はインドの工業には恩恵をもたらしたように思えた。町の周辺には新しい紡績工場も見受けられた。しかし、「5年前にまぶしかった」マナハバードの町が、乞食の群れによって「アリ塚」のようになってしまったのは、驚くべき変化であった。年配の乞食の一人から、以下のような身の上話を聞かされたララーは、路上で暮らす人々が「どこにも行くところのない小農」であることを知って衝撃を受ける：

だんな、おらの田畑もうないんだ… 弟が地主の会計とグルだった。手形で借りた借金が払えなかったんだ… だんな、奴らの裏切りをあなたにどう言ったらいいんだろう… おらが支払いの期日を守れなかったんで、奴らはおらの担保の土地を競売にかけ、弟が競り落とした… ああ！ 何て運が悪いんだ。だんな、何をあなたに言ったらいいんだろう… おらは夏は裸足で歩いて、田畑を耕した。ポロを着てたけど、いい肥やしを田畑にまいたんだ。作物をたくさん刈り取ったけど、しっかり稼げなかった。田畑を取られず生き延びるために大麦を食べて小麦を売ってたんだ。わしは何て哀れなんだ！ あの田畑の奴隷みたいだった。それにしがみついで娘まで売っちゃった。面子を捨てても、田畑を守れなかった… 飢饉が田畑を襲ったんだ。神様の怒りがわしらの頭に降りかかった

7) ドイツにおけるインドの独立運動については、Tilak Raj Sareen, *Indian Revolutionary Movement Abroad, 1905-1921* (New Delhi: Sterling, 1979) 116-129; 石田保昭『不服従の思想——ガンジーをどうのりこえるか』(講談社, 1970年) 64-68頁参照。

んだ。田舎の連中は蒔く種も買えずに乞食になっちまった。道作りの土方仕事にありついた奴もいた。だけど、お上は道作りもやめちまった。ああ、貧乏人に残された道は一つだ。それは、死ぬことだ！… (31)

乞食になった元農民に限らず、パンジャブの小農たちが納税や「蒔く種」を買うために金貸しに借金をするのは、戦前からの慣わしであった。彼らは、豊作でも資金繰りのために、収穫後ただちに小麦などの換金作物を、商人が決める市場価格を下回る価格で売らなければならず、利益が得られなかった。借金が期日までに払えない小農が担保の土地を取り上げられるのも度々であった。しかし、ラーラーには緑に覆われたパンジャブを「飢饉」に結びつけることはできなかった。町の菓子屋からその「飢饉」が天候によるものではなく、「金銭の飢饉」(money famine)であることを知らされた彼は、あらためて実家の様子が心配になり、年金の手続きをしなかったことを後悔しつつ、家路に着く。道中、たまたま同じバスに乗り合わせた村の有力者たちや運転手になった幼友だちのグギから、無事に生還したことを喜ばれるものの、彼を出迎える家族は誰もいなかった。真っ先に再会したかった母親は、長男シャーム・シンを失ったり、経済的に逼迫した家のやりくりの苦労が祟って2年前に他界し、一家の不幸に絶望した次兄は世捨て人になっていた。また夫や婚家を失った兄嫁ケサリは、自分の両親の元へ戻ってしまった。ラーラーの実家は、大地主の息子でケサリを陵辱したハーディット・シンを殺害したシャーム・シンの弁護士料を捻出するために、競売に出されて大地主の手に渡っていた。叔父のハーナム・シンも、借金のために耕作地を手放し、レンガ作り工場の工員から農業労働者となって何とか生計を支えている有様だった。搾油や玉ねぎ作りで景気よかったイスラムの隣人ファズルも、どういうわけか農業では生活が立ち行かなくなって耕作地を失い、機織りに戻って糊口をしのいでいた。その一方で、大地主のハーバン・シンは当局から庇護されてリラプル(Lyallpur)の入植地に土地を授かり、相変わらず羽振りがよかった。また、機織りのグラムのように、紡績工場の工場長に出世して周囲から妬まれる不可触民の若者もあった。

留守中の故郷の変化に驚いたラーラーは、「別世界から来た幽霊」になったような気持ちになり、ただ周囲を傍観するだけで、一家を破産に追い込んだ大地主を恨む気持ちも湧いてこなかった。しかし「自暴自棄になっていたナンドプル8)の農民たち」は、ガンディーの非協力運動や、ドイツ帰りのヴァルマ教授が吹聴する「革命」思想に<sup>8)</sup>多少なりとも感化され、ハーナム・シンの「ヒンドスタンよ！この国は、イギリスのライオンに食われて痩せて骨だけになった雄牛のようだ…」(63-64)という叫び声に共鳴して、「収奪された者どうしの組織やクラブ」を作ったり、一丸となって地主や当局に陳情運動をするようになっていた。彼らは自分たちの苦境の原因が、「神の怒り」や「前世の因縁」というよりは、むしろ政府が押し付ける政策や社会制度にあることがおぼろげながらも分かるようになっていた。そのた

8) ヴァルマ教授は1930年代にブラジェシュ・シンのもとに滞在した共産主義者のM.N.ロイ(M.N. Roy, 1887-1926)をモデルにしたと言われるが、教授は中国、ロシアでも活躍したロイのような行動力のある人物として描かれていない。P.K. Rajan, "A Dialogue with Mulk Raj Anand" in *Studies in Mulk Raj Anand* (New Delhi: Abhinav Publications, 1986) 118; Prasad, *op. cit.*, 197 参照。

め、彼らは叔父にせがまれて以下のような演説をするラーに同情したり、演説を盛り上げるスローガン——「地主を打倒せよ!」、「金貸しを打倒せよ!」、「飢饉に見舞われた者には救済を!」——に応じるかのようにその場で「軍団」(Jatha)を組みデモ行進をする気になる:

大戦争が始まって、私はフランスに遠征した。」…  
 「塹壕は溝のようで、大地が沼のようになるまで雨が昼も夜も降った。」…  
 「我々が戦場に到着してから4ヶ月で、12万人の同胞のうち2万人が殺された。」  
 「我々は何のために戦っていたのか。」…  
 「イギリスの金持ちのお偉方が女遊び、美味しい食べ物やワインを楽しむためだったんだ。」  
 「勿論、我々は軍人として奉仕する見返りの報酬を期待した。」…  
 「報酬話はインドの同胞をだます嘘だった、その嘘のために仲間たちは戦死した…」  
 「今日、故郷へ帰って母が亡くなったことがわかった。私の家庭は崩壊して収奪された。耕作地もない…」  
 「君たちは地方長官のところへ請願に行く。先日は、農民軍団が長官のところへ行き着けなかったと聞いている。もし、君たちが行き着いたら、兄弟たちよ、君たちの苦勞話に私の証言を付け加えてくれ。そして長官に政府は何とかしてくれるのか聞いてくれ…」  
 「さあ兄弟たちよ、行進しよう!そして叫べ、『政府は何とかしてくれるのか!』」  
 バニアンの木陰から農民軍団が現れた…それは、即席に組織された一団ではあったが、男たちの顔には、ラーが何百回も一緒に行進した軍隊仲間の表情にも見られなかった決意がみなぎっていた。(52-53)

迷信や因習に束縛されていたナンドプルの農民たちの「奇蹟に近いような」意識の変化は、社会改革や個人的な幸福を求めるラーにとって歓迎されるべきものであった。しかし、彼には幼なじみの若者たちが、ガンディーが禁じる暴力を厭わない革命的な思想に心酔している有様は不安だった。とりわけ、法律家になったサントック・シンが化学を学んで寺の近くの洞窟で爆弾を作り、軍人の父親を真っ先に暗殺するという話は、彼を驚愕させた。確かにガンディーの非暴力思想には限界を感じるものの、悲惨な兵士の最期を数多く目撃したラーは、殺人を伴うテロリズムには賛同しかねた。そのため、金貸しの息子で幼な友だちのチューランジが、「ロシアの革命が引き起こした無秩序な状態が広がる」ことを恐れて、「小農にとっては、泥棒や冒険家になって田舎で暴威をふるうより、下積みのままで少々の苦難に耐えるほうがよい」(57)と言って、テロ行為に参加することを躊躇するのも無理からぬことのように思われた。とはいえ、小農の苦難が「少々」ではないことを実感していたラーは、叔父が推進する農民運動に貢献するのも義務だと感じた。そのため、ドイツの収容所で知り合ったヴァルマ教授から、連合州のカンワル・ラムバル・シン(通称、カウント<伯爵>)のもとへ行って「小農や小作人、追い立てられた小作人、労働者たちを団結させて、それぞれの地域で彼らの差し迫った要求を組織だつて公に知らしめる」(88)活動への協力を依頼された彼は、処女寡婦となったマヤとの駆け落ち願望もあり、教授に伴われラージュガル(Rajgarh)<sup>9)</sup>へ向かう。

9) ラージュガル(Rajgarh)は架空の地で、モデルは連合州プラタプガル県の村カラカンカル(Kalakankar)であるとされる。Cowasjee, *op. cit.*, 参照。

## III

ラージュガルにたどり着いたたラーは、パンジャブに比べて周囲の自然がより原始的で、村民たちは封建的な制度に耐えながら暮らしていることを認識する。村には、ランパル・シンの大邸宅以外にはめばしい建物もなく、泥でできた村民の小屋が散在するだけで、「背の高いトウモロコシやヒラマメの木が生えている低湿地や、寂れた部落の側壁を囲む木立も点在していたが、田の畦には、伸び放題の灌木や麦やとうもろこしの刈り株が生い茂っていた」(89)。また北の村境に流れる「ガンジス川の流水音は何とも不気味で、夜には果樹園の甘い匂いがするツル植物は、おぼろげながらも大邸宅全体の運命を支配するような異様な感覚を漂わせていた」(91)。ヴァルマ教授によれば、そのようなわびしい環境下の農民たちは、多少なりとも所有地をもつパンジャブの小農とは異なり、大多数が小作人や農業労働者で、封建的なタルクダール (Taulkdars, 徴税権をもつ大地主、ベンガル地方ではザミンダールと呼ばれる) の法外な取り立てによって、悲惨な状態にあるという。ラーは間もなく、教授の言うとおり、近隣の小作人たちの貧窮が高額な地代ばかりではなく、ナズラーナ (nazrana) と呼ばれる様々な口実で徴収される特別税や、領主や役人への礼金、賄賂によって深刻化していることを知って驚く。また、そのような搾取に対して多くの農民がハーナム・シンとは異なり、怒りの声を上げないのも不可解であった。しかしラーは、間もなくランパル・シンの援助を求めて仲間と共に到来したスクハの態度や話によって、それが農民たちが絶大な権力をもつ大地主とその手先を恐れ、押し付けられる悪弊に忍従している故であることを理解するようになる：

その片目の男は、ナシラバードの太守が、不平を言いに来て来る小作人に対して取り決めた規則に従って、ランパル・シンの足元に4アナのニッケル貨幣を置いた…

「旦那様、私はどうお話ししているのか… あなたには、あの見張りのポーリ・シンのような愚鈍な役人が御し難い奴だとはお分かりにならないでしょう。奴は、斧の枝が採れる森を攻撃する斧のような奴です。奴に2年間も賄賂を払いました。でも、私は去年は地代も払えず、あいつにやる金がありませんでした。そしたら奴が悪巧みを仕組みました。私は畑で穀物を刈り取っていました。あの見張りがやって来て「誰かがお前の家の錠前を壊した。強盗事件を報告しろ」と言いました。家へ走って帰り、錠前が壊されているのを見つけましたが、土瓶一つも盗まれていなかったんです。ポーリ・シンの悪巧みだとわかりました… 警察には報告しませんでした。そしたら奴が、警察署へ出向いて私を報告義務違反で告発すると脅しました。奴が告発しないようにする唯一の方法は、乳牛か雄牛一頭を買うのに十分な50ルピーを払うことでした。仕方なく借金をしてあいつに払いました。今年、奴がまた金を要求してきました。太守の娘が警察のエフェンディ署長と結婚するので特別税を払わなくてはならんそうです… 私は、ひどく貧窮していたのでポーリ・シンにその納税を断りました。そしたら奴が私を田畑から追い立てるために不動産局へ行っただけです。私の田畑は今、別の小作人が耕しています。旦那様、ポーリ・シンは、ふんどしを締めてそこで見張りに立ってるんです…」

「何故、お前は警察に行かないんだ」とランパル・シンは尋ねた。

「警察は奴のグルですよ。50ルピーから20ルピーの上前をはねるんです。見張りは20ルピー、不動産局の会計は10ルピーを取るんです…」(96-97)

ナシラバードに限らず、警官や小役人が賄賂を取ったり不正を働くのは、パンジャブでも

同様であった。とはいえ、連合州では彼らと多くの封建的な大地主が共謀して領民を搾取するために、スクハのような小作人の苦しみはより深刻であった。<sup>10)</sup> 彼らは、経済的に苦しめられるだけではなく、「茶色や黒い顔のお偉いさん」からただ働きを強制されたり、時には死に至るような暴力も受けていた。それはスクハの親族のチャンドラが熱病のために木材の伐採の強制労働を拒んで、太守の配下によって打ちのめされ、無理やり木に登ばらされて転落死したり、協同組合銀行 (Co-operative Bank) の元会計のミトゥが副長官のためのただ働きの荷物運びを拒んで、小役人から路上で乱打されるようなエピソードに浮き彫りにされている。スクハによれば、このような暴虐を取り締まるべき絶大な権力をもつ「白いお偉方」は、自分たちにとっては遠すぎて「見えない」存在であり、「車で管轄地を形式的に巡回して」すぐに立ち去ってしまうという。警察や不動産局で賄賂を取りながら実務を担当するもの、ナシラバードの太守一族と組んで農民運動を妨害するもの、「茶色や黒い顔のお偉いさん」、即ちインド人の警官やセポイ、小役人たちだった。そのため小作人たちにとって、地元の名士として影響力をもち、スクハやチャンドラの父親のブペンドラの窮状を救おうとするランパル・シンは、ブルジョワ中心主義で農民問題に真剣に取り組まない国民会議派のメンバーよりも頼りになった。そんな農民から信頼されるランパル・シンに「同志」(Comrade) として認められたラルーは、「アグラやアウドのある連合州の雰囲気にも慣れ…大邸宅に招かれる様々な人々の意見や特質を比較対照して、<sup>11)</sup> 新たな人生に熱い思いを抱くようになる」(100)。

#### IV

ラージュガルでラルーが追い立てられた小作たちを団結させて「革命」運動へ導く仕事に献身するようになったのは、ヴァルマ教授が説く「共産主義」や「社会主義」に心酔したというよりは、むしろ「人生の目的は他人への奉仕、同胞への献身」という先祖伝来の家訓を遵守するためだった。なるほど「共産主義者の法廷」で飛び交う「同志」、「ブルジョア」、「革命」という言葉にスリルを感じるものの、マルクスやレーニンがいかなる人物かよく分からない彼に、それらの意味を十分に把握することは困難だった。そもそもラルーには、正妻がありながらも、ヨーロッパ女性の愛人をもったり、「同志」たちと宴会や狩に興じ、陳情に来る貧乏な小作人から4アナを提供させるという悪弊を廃止しないランパル・シンが共産主義に染まるのも不思議だった。「地主たちを川へ放り込んで…小作人たちに耕作地を与え、ソビエトを作る」(150) という彼の願望も、その貴族的な生活ぶりとは矛盾していた。また

10) 連合州の農民問題については、ギャーネンドラ・パーンデー、「インド・ナショナリズムと農民反乱——アウド農民運動、1919-1922年」R.グハ〔他〕著、竹中千春訳『サバルタンの歴史——インド史の脱構築』(岩波書店、1998年) 102-197頁参照。

11) ブラジェシュ・シンの親族でカラカンカルの領主だったラージャ・ランパル・シン (Raja Rampal Singh, 1885-1909) はインド国民会議の創設者の一人として、その活動を支持した。そのため、当地にはガンディーやマラーヴィア (Madan Mohan Malaviya, 1861-1946) などの国民会議派のメンバーや共産党員のM.M.ロイが、政治活動のために訪れたという。物語の中で、ラルーが様々な活動家に会うのは、このような史実を反映している。Cawasjee, *op. cit.*, 115-16参照。



彼が「同志」と呼ぶ側近たちは、農夫のグプタ、元兵士の共産主義者ラム・ディム、ベンガル人猟師ナンドゥー、アーリア・サマージストの印刷工のミスラという顔ぶれであり、生活を維持するために彼らがランパル・シンに追従しているような印象も否めなかった。しかしラーは、スクハの耕作地を取り戻すために、ナシラバードのイスラムの太守のところへ直談判に行つて、下記のように太守の甘言や重臣ハディヤット・ウラーの脅迫にもめげず、宣戦布告をするランパル・シンに共感を抱く：

「悪い影響が漂っているんだ、ランパル」と、曖昧ながらも当てこすりの鋭さをもってハディヤット・ウラーは言った。「私は、面倒を起こす小作人はすべて他の者への見せしめに懲らしめてる。あんたは奴らが蜂起したらどう対処するつもりかね。」

「勿論、蜂起に力を貸してやるだろうね」とランパル・シンは何気なく言った。

「ああ、馬鹿なことをするな」と、苛立ったハディヤット・ウラーは笑いながら言った。

「真剣に考えてくれ。近いうちに私と晚餐に行つて、この領主連合会のことを話し合おうじゃないか。」…

「そのうちに狩猟に一緒に行こう、ランパル君」と太守も提案した。「色事の季節の春も来たじゃないか。もつとも今、ラックナウの遊女たちは、休業中だがね…」

「私は、他の娯楽に熱中してますよ」とランパル・シンは言った。

「おいおい、カンワル・ランパル殿よ、仲間はずれになりたくないだろう」と微笑みながら、太守の息子ジャマールは言った。「君の弟ビルパル・シンも友だちのハディヤット・ウラーもこちら側についているんだぞ。」

「それでは二人とも追い立てられた小作人たちが、自分たちの支配を逃れて、私の振る旗の下に集まるのを見てとんでもない屈辱を感じるだろうね」とランパル・シンは言った。「君たちは、あんなふうには小作人たちを扱い続けても、まだ政府から授かった農地が残るんだつたら幸運だよ。なぜなら地主階級を作った帝国政府から、政務長官を通して権限を制限される以外は、多くの小作人たちの生活が貧窮しているのに、我々はチングス・カンのように、それぞれ宮廷を維持できるんだからね。」

「では、私たちの下僕が君に誘拐されたら、エフェンディ署長が自分の仕事を行使することになるよ」とハディヤット・ウラーは言った。

「残念だけど、エフェンディ署長はもう暴力の独占者じゃないよ」とランパル・シンは脅しているとは聞こえないように声を押し殺して囁き声で言った。

「私たちは、誰が暴力の独占権をもっているか分かるようになるさ」とエフェンディ署長は口を固く結んで言った。

「恐ろしい争いが起きるだろう」とハディヤット・ウラーは、凄みのある含み笑いを浮かべながら椅子から立ち上り、その場を離れた。(122-23)

ランパル・シンと太守一派との会話は、ラーにとって連合州の封建的な領主たちの暴君ぶりをあらためて認識させるものであった。そのため警察署長までが太守に組して「暴力の独占権」を主張するような風土に憤ってランパル・シンが小作人の肩をもち、暴力を辞さない「革命」を推進するのも、それなりの正義のように思えた。確かに、ナンドプル幼なじみのテロリズムには怯むものの、圧制者の脅迫や暴力に屈することは、ラージプート（戦士民族）のランパル・シンばかりではなく、シーク教徒の帰還兵ラーにとっても屈辱に感じられた。そのような彼の気持ちは、太守一派の様々な姦策によって小作人のための「革命」活動を阻まれるごとに高まっていく。

## V

ナシラバードの小作人への圧制に抗議するために、ランパル・シンが最初に計画したのは日食祭が開催されるラージュガルへ巡礼に訪れる小作人たちの社会意識を喚起することであった。「同志」たちは、ランパル・シンの要請に応じて、太鼓を叩いたりヒンドゥーの聖者の名を唱えてガンジス河の水でお清めを終えた小作人たちを演説会に誘う。そして彼らに「小作人の生活を妨害するのは、地代を払うために雪だるま式に膨らむ借金と耕作地からの追い立て」であることを説いて、インドの地主制度が彼らの生活を逼迫させる悪であることを認識させようとする。演説の得意な「同志」ラーはさらに、「ロシアと呼ばれる遙か遠くの地では、君たちと同様、小作人が苦しめられていたが、彼らは自分たちの政府を築き上げた…今や小作人や労働者がその国を支配し、そこに住む者はみんな兄弟のように暮らしている…」(128)と共産主義を鼓吹する。しかし、ロシアがどこにあるのかも分からない小作人たちの反応は鈍かった。それどころか、日食を「陽が沈まない大英帝国」説の反証として利用し、イギリス支配の打倒を示唆するラーの演説は、三日月をシンボルとするイスラム教徒の小作人を怒らせる。その場は何とか取り繕われるものの、肝心のランパル・シンの演説も、日食祭を穢すような演説集會に怒ったヒンドゥーの聖職者集團の妨害によって暴力的に解散させられてしまう。演説に耳を傾けようとした少数の小作人たちも、乱闘騒ぎと聖職者集團の背後にいる警察官たちの姿を見て恐れをなし、立ち去ってしまう。

日食祭を利用して、小作人たちを、「ソビエト」作りの運動に取り込もうとする計画が失敗するのは、ナラシダバードの太守が、彼らの政治的な活動はヒンドゥー信仰に対する冒流行為だと聖職者集團を炊きつけ、警察を後ろ盾にして集會を妨害した故である。しかし、そもそもガンジス川で身を清めるために集まる信仰心の厚い小作人たちに、いきなり見知らぬ外国の「革命」話を持ちかけるのも無鉄砲とも言える。国民會議派のメンバーで弁護士のスリジャット・ティワリが「この国の宗教的タブーを笑っては、あなたの活動は決して成功しない…」(157)と述べるように、ランパル・シンがインドのヒンドゥー信仰を軽視することは彼の「革命」計画を妨げることになる。

ランパル・シンにとって、無神論的な共産主義を批判するとはいえ、労働の価値と平等主義を標榜する国民會議派のティワリは、農民問題の解決に協力するべき存在だった。ティワリにしても、国民會議派が農民運動を民族運動へ取り込もうとしていたために、ランパル・シンの主張を無視するわけにはいかない。しかし、一個人としてティワリは、個々の農民の窮状に対して関心が湧かず、乞食になるような小作人は「誠実に一日の仕事をこなすより、物乞いをするのを好む」(149)単なる怠け者に感じられた。さすがに、ランパル・シン一行と狩猟の最中に遭遇したチャンドラの非業の死には関心を示すものの、事件に深入りしたいとは思わなかった。そればかりか、息子の死を嘆いて自分の足元にひれ伏すブペンドラに「立ち上がれ、虫けら、ウジ虫、犬め!…髭を生やしているのに、自分が恥ずかしくないのか」(161)と侮辱的な言葉を浴びせる。そんなティワリの言葉に憤ったラーは、チャンドラの

亡骸をアラハバードまで運び、国民会議派のメンバーたちに、小作人の窮状を訴えるという計画を思いつく。<sup>12)</sup> それはブルジョワ中心主義で、農民の暴徒化を恐れる会議派のティワリには乗り気になれない話ではあるものの、「 Chandra が虐待されたような事件が起きることが信じられない者たちの目を開かせるべきだ」(164) というララーの主張に反論することができず、一行をアラハバードで出迎えることに同意する：

「もし行列が本当にアラハバードに到着できたら、ティワリさんよ、あんたは多分、国民会議派のメンバーたちに Chandra の亡骸を受け取らせるでしょうね。」

「勿論、全インドの観点からは、これは取るに足らない事件だけど」とスリジャット・ティワリは、あわてて言った。そして、自由主義者のヴァルマ教授への礼節とアラハバードの国民会議派の幹部としての重い責任のどちらを優先するべきか迷った。「我々の前にはもっと大きな問題があるんだ。しかし受け取ることで、どんな事ができるのかわかるだろう。」(166)

ララーを先頭に、 Chandra の亡骸を、「同志」たちと Chandra の親族や友人、マドフ、ラグー、サンガルなど、計20人で37マイルの距離を運ぶという「行進」は、喘息気味のランパル・シンやインテリのヴァルマ教授には「荷が重過ぎた」。そのため、彼らは「行進」のための資金を出し、アラハバードへ先回りをして一行を歓待するという形の協力を約束する。有力者たちの援助に強気になった一行は、「ラーマ様、シータ様」と農民運動の掛詞を叫んだり、農耕詩を口ずさんで道中の村人の注目を集めながら行進するが、ジャングル道へさしかかるところで、行く手を阻もうとするボーリ・シン一派やその番犬メアリーとジョージに<sup>13)</sup> 襲われる。「止まれ、待て、ごろつきのばか者めが！ 脱走者！ よた者！ 待て、支配人様が来るぞ！」(170) と小作人たちを威嚇して、<sup>14)</sup> ブルドッグ犬をけしかけるボーリ・シンに激怒したララーは、「虎になったように」、「グルカ人の力士」ボーリ・シンに飛びかかり、ナンドゥーやグプタの協力を得て彼を打ち負かし、一行を森の中へ避難させることに成功する。しかし間もなく彼らは、ボーリ・シンの応援に駆けつけたハディヤット・ウラーたちの銃撃にあい、慌てふためいて Chandra の亡骸を担ぎそこなって川へ流してしまう。それを取り戻そうとしたナンドゥーは、川へ飛び込み何とか追いついて亡骸を背負い上げるが、頭を打ちぬかれて斃れる。あまりにひどい仕打ちを非難するララーの剣幕に、ハディヤット・ウラーは姿を消し、一行は何とか道中の警察の追跡をかわしながら捨て舟で川を下り、アラハバードに到着するが、途中で腐敗しかけた Chandra とナンドゥーの遺体を運ぶことを諦め、二人をガンジス川に水葬する。

12) Chandra の事件は架空であるが、ララーの陳情運動は、1920年に J. ネールが見聞したエピソード——連合州のプラタプガル県の奥地から約200人の農民が、自分たちの悲惨な状態をアラハバードの町の政治家に知らせるために50マイルの行進をした事件——をヒントに描かれている。ジャワハルラル・ネール著、磯野勇三訳『ネール自傳 I』(立明社、1961年)70-71頁参照。

13) 「ジョージとメアリー」というブルドッグ犬の名は、当時のイギリス国王(ジョージ5世)と王妃の名前である。この命名は、小作人を迫害するタルクダール制度を作ったイギリス支配への当てこすりとして解釈される。Prasad, *op. cit.*, 200参照。

14) 一口に「小作人」、「借地人」と言っても、その種類は「住み込み小作」、「通い小作」など、複数にわたる。ハディヤット・ウラーが執拗に、ブペンドラたちを連れ戻そうとするのは、彼らが領地に束縛されて年季奉公を強いられる「住み込み小作」という設定であるように思われる。ネール、前掲書74頁参照。

## VI

「アラハバードへの行進」の途中で、ナンドゥーを犠牲にしたラーは責任を感じてガンジス川を下りながら自らの「革命」に対する誠意を問いかけたり、マヤを置き去りにしてまで農民運動に貢献することに意義があるのか疑問に思ったりもする。しかし、何とかアラハバードのランパル・シンのもとへ辿り着いたラーは、彼の計らいで当地のJ.ネルーの邸宅に滞在中のガンディーに面会を許されて、<sup>15)</sup> 気を取り直す。ビハールのチャンパーラーンで藍作りの農民を搾取る栽培農園主に対して、監獄に入ることも覚悟で、農民の陳情運動を支持したガンディーには、連合州の小作人のためにも何らかの力添えを期待できた。ところが、ラーは「恐れるな」と言って非協力運動を推進したガンディーの教えを守って、ボーリ・シンやハディヤット・ウラーと戦ったにもかかわらず、彼から褒められるどころか、正当防衛とも言える一連の闘争を「暴力」として咎められる：

「小作人たちは、あなたが彼らに助言したことを実行する準備ができています、マハトマ様」とラーは言った。「彼らは戦う覚悟をしています…」

「彼らは、私が起こそうとした種類の戦いの覚悟はしていない」とマハトマ・ガンディーは厳しく断固として言った。「もし、覚悟ができていたなら、ナシラバード領内でトラブルは起こらなかっただろう。」

「それは領内で、小作人たちがいる若者の死に対して抗議したから起こったのです」とラーは言った。

「それは、答になっていない… たとえ、虐待されても非協力の運動員なら、苦難に耐えながら受動的な不服従によって、その意志を貫徹するだろう… 君はどうなんだ?…」

ラー・シンは、スリジャット・ラドリ・プラシャド・ティワリが、ラージュガルで実行した彼の闘争をガンディーに報告しただろうと推測した… 彼は自分が暴力的だったか、あるいはそうでなかったのかわからなかった…

「もし、小作人の不平を解消するために、闘争を起こすことが暴力なら… 私は暴力を振るったこととなります」とラーは告白した。「私は、グルカ人の見張りを乱暴に扱いました…」「小作人の不満を掻き立てたことではなく、領主に対して革命を喚起することが暴力なんだよ」とマハトマは言った。

「勿論、私は『革命』が起きることを信じています」とラーは言いたかったが、それを告白したら、マハトマにナシラバードの小作人たちへ関心をもたせる機会を完全に失ってしまうことは分かっていた… 結局、ガンディーは自分より年配で賢く、アフリカ在住のインド人苦力（クーリー）のために成し遂げた偉業を通して、他の誰よりも闘争を導く方法を心得ていた。(196-97)

ラーの懇願にも関わらず、「暴力」を伴うナシラバードの農民問題に関わりたくないガンディーは、当地への訪問を「予定が詰まっている… もし小作人たちが私の決めた規則を守るなら、きっと圧制から解放されるだろう」と言い訳をして断る。食事会の席でも、ネルーが窮状を訴える小作人たちの訴えに耳を傾けようとするのに、ガンディーは小作人たちには慰めの言葉を一言もかけず、不可触民の救済のために一同が「罪」を清めることを唱えるば

15) ガンディーが、物語の設定年代にアラハバードを訪れたというのはフィクションである。ちなみに、ネルーがアラハバードに邸宅 (Anand Bawan) を所有していることや、連合州の村々を訪れて農民問題を考えるようになったというエピソードは、歴史的事実に基づいている。Coasjee, *op. cit.*, 116参照。

かりであった。そのためララーにとって、ガンディーは「我々が食料を求めている時に、宗教を語り」、「秋の雲のように到来して、祝福の言葉をほんの少しかけるだけで去ってしまう」(201)、取り付く島もない自己撞着型の宗教家のように思われた。同様に失望したランパル・シンも、「糸車がこの破滅的な機械の時代の悪弊をすべて解決する」(202)という民族運動のキャンペーンを嘲笑したり、ガンディーを「都会の人々の利益のために農民を犠牲にする『商人』である」と批判する。彼には、弱者に寄り添いながら、ブルジョワにも取り入るガンディーの姿勢が不愉快であった：

マハトマは、糸車でインド全体が必要とする布地を供給できないと分かっている。だからメガネの奥の左目でウィンクし、工場主の連中に自分たちの生産計画を実行するように目配せしている。二重取引の隠蔽目的ですること総ては、神秘的な文言にすぎない… あえて言うなら、祝福を与える彼の右手は、金貨を手にした左手が何をしているのか見えてないんだ。(204)

戦後に南アフリカから帰国したガンディーが度々、不可触民問題に没頭して民族運動から遠ざかったり、政治活動の資金援助を受けるために紡績工場主と懇意だったことは歴史的な事実として語られている。しかし、彼は法律家ではあっても「都会の人々の利益のために農民を犠牲にする『商人』だ」と批判するのはいかなるものか。なるほど共産主義を支持する活動家の目に、実際に連合州の農民に対して陳情活動ばかりか「非協力」運動をも中止して、地代を払うように命令したガンディーは、<sup>16)</sup> 地主の肩をもつブルジョワ主義者のように映ったかもしれない。しかし、彼が連合州の小作人がラム・チャンドラ (Ram Chandra, 1864-?)<sup>17)</sup> の指導の下に過激化した小作人たちの肩をもって、ブルジョワの地主たちの不興を買えば、インド人が一丸となって進めるべき民族運動の妨げになった。地税を政府に納める地主階級を「非協力」運動に組み込むことは、ガンディーにとって重要なテーマであった。インドの自治なくしては、農民も労働者も救えないという信念をもって彼は、社会改革よりも民族運動を優先したのである。彼がチャンパーランやクジャラート州のケーダで農民たちの抗議運動を支持したとすれば、彼らの標的が「インド人大地主」ではなく「イギリス人」農園主や帝国政府であり、それが反英独立運動に繋がったからだと思われる。

そのようなガンディーの方針を、局地的な「革命」活動に執心するララーや「同志」たちは理解できず、ヴァルマ教授が「ガンディーが来るように説得できれば、我々には何年もかかることを、一日か二日で成し遂げるだろう。何千人もの人々が精神の高揚 (*darshan*) を得るために来るから、すぐさま農民組合 (Kisan Sabha) を組織することができるだろう」と評価するのも苦々しく思う。そのため彼らはガンディーを頼りになる有能な政治家ではなく、雲の上の「聖者」と見なし、社会主義を標榜したネルーに期待を寄せるようになる。それはラージュガルの農村を視察に来たネルーを、ララーや住民たちが下記のように歓迎し、その人となりを賞賛するエピソードに物語られている：

16) ガンディーが、連合州の農民に対して出した「指令」については、バーンデー、前掲書、116-18頁参照。

17) ラム・チャンドラの経歴はあまり明らかにされていないが、マハラシュートラ出身のパラモンで、フィジーで年季奉公をした後、連合州の農民運動を指導したと言われる。巧みな演説と指導力で農民たちの心を捉えた彼は、ララーのモデルとされる。Prasad, *op. cit.*, 210-11; Kapil Kumar, *Peasants in Revolt: Tenants, Landlords, Congress and the Raj in Oudh, 1886-1922* (New Delhi, Manohar, 1984) 82-173参照。

「ネルー先生、万歳！」とスローガンを叫ぶ役のラム・デインは大声で言った。

すると、追い立てにあった小作人、郷紳や役人たち、さらにジャワルハル・ネルーと同じ三等列車に乗っていた乗客までも共鳴してそのスローガンを叫んだ…一瞬にしてプラットホームにいた総ての住民が、指導者ネルーの顔が見えた客車に群がった。郷紳たちがその群集をかき分けて先頭に立ち、濡れタオルから取り出したマリゴールドとジャスミンの花束をネルー先生の首にかけようとした。

「ネルー先生、万歳」とラルー・シンも呼びかけ、追い立てにあった小作人たちを代表して先生の首にかけようとした花束を掲げ、小作人たちに自分の後に続くように促した。

小作人たちは、ラルーの呼びかけを繰り返したが、彼らの先導者だと主張し、勢いよく前に進んだ金持ちたちの虚勢に怯えていた。

ネルーは、すぐに後ろに取り残された小作人たちに気づいたようだった。そして疾走して来るお偉方をかき分け、ラルーや小作人たちのところ来て、まず最初に彼らに花束をかけさせた…

ネルー先生には人情がある…それだけでも、田舎を愛するという言葉が、どれほど民族運動によって、自分たちの名声や富が得られるかと計算する都会の政治家集団の中から、彼を人徳のある模範として推薦するのに十分だ…

ネルーのマナーには、非執着あるいは自制心の気配があった。それは同志のサルシャの言動により際立つ特徴だったが、それが彼を自由にし、明らかな国際主義者に行っている。(236-38)

連合州の村々を訪問したネルーが実際にはガンディーの指示に従って、当地の農民運動に協力しなかったことや、ラルーのモデルであるラムチャンドラを最終的に「無責任」だと批判したことを考慮すると、<sup>18)</sup>「同志」たちの彼に対する期待や賞賛は大げさ過ぎるとも言える。また、彼らが批判するガンディーのイメージは、あくまでも連合州の暴力を厭わない急進的な農民運動家の目に映ったイメージであり、『不可触民』の執筆にあたって協力を得た作者が、<sup>19)</sup>ラルーやランバル・シンほど彼に批判的であったとは思えない。

とはいえ、マルクス主義に傾倒していたアーナンドは、連合州の農民運動に歯止めをかけたガンディーの方針には不満だった。ラルーと同様、彼はガンディーの禁欲主義や、伝統的な自給自足のインドの農村を理想化する思想にも賛同しかねた。「人を養う農業の現実を軽視する国家に明るい未来はない。農民運動を民族独立運動に取り込むために、まず底辺の農民たちの飢餓を救うことが先決である」というのがアーナンドの見解であった。そのために、彼はあえてガンディーが禁じた農民運動の進展を詳細に描いたと思われる。

## VII

ガンディーが「領主への革命を喚起すること」を批判するにもかかわらず、ネルーの農民運動への関心に気を取り直したランバル・シンは、独自に農民を団結させて「革命」闘争へ導くために、農民組合本部「キサン・ナガル」の設立に取り掛かる。それは、ナンドウーの住む領地内の小屋を増改築するものではあるが、追い立てられた農民たちの宿泊施設にもな

18) この点に関しては、パーンデー、前掲書123頁；ネール、前掲書73頁参照。

19) 1932年にアーナンドはアフマダバードのガンディーの修道場に滞在し、『不可触民』の執筆のために、トイレ掃除の修業をし、原稿の修正をガンディーから指導された。1938年にもセヴァグラム (Sevagram) に滞在中のガンディーのもとを訪れている。Krishna Nandan Sinha, *Mulk Raj Anand* (New York: Twayne, 1972) 13-14参照。

ることを知った小作人たちは、「同志」たちと共に泥まみれになって建設作業に協力する。家畜も同然に扱われていた彼らには、それまで人生に対する目的意識が希薄だったものの、そんな「組合」活動への参加によって社会的な主体性や仲間との連帯感が芽生える。建設中に、ネルーが「キサン・ナガル」の開幕式に出席するという知らせも、彼らの励みになった。それまで大地主や警察、役人を恐れていた彼らも、団結力に目覚め「お偉方」に立ち向かう気になる。

小作人の団結や組織活動は、ナシラバードの太守一派にとっては憂慮すべき事態で、彼らは組合を叩き潰すためにあらゆる手段に訴えるようになる。組合員の士気をそぐために、彼らは、まずエフェンディ署長の部下を使ってネルーがキサン・ナガルの開幕式に出席できないように、彼の乗る車をパンクさせる。そして、ネルーが不在の開幕式でランパル・シンたちが演説によって、近隣の農民に組合活動への参加を促す最中に、5人の警官と協同組合銀行の小役人アーメッド・シンを会場に送り込み、乱闘騒ぎを起こさせる。思いがけず小役人や警官から殴打されたララーは、殴り返さなかったが、彼を守るために応戦した片目のスクハが警官から暴行されて全盲になってしまう。それに激怒したラム・ディン、グプタが参戦して、キサン・ナガルは大乱闘の場と化す。開幕式を台無しにされて怒ったランパル・シンの恫喝によって、小役人や警察官は一旦は引き上げるものの、間もなく、エフェンディ署長が10人の部下とビルパル・シン、協同組合銀行の副長官を引き連れて到来し、ララーとグプタ、ラム・ディン、スクハ、ラグフ、マドフ、ミトゥ、3人のミトゥの共犯者、計10人の逮捕状を突きつけて、一同を警察署へ拘引する。ララーたちが逮捕されたのは、数日前にキサン・ナガルに向かう途中の路上で、アーメッド・ディンに暴力を振るったという容疑に基づくものであった。しかし、それは単に強制労働を断って殴打されるミトゥを庇うためにララーがアーメッドを一発殴って止めただけのことだった。ランパル・シンから事情を聞いた副長官メーターの計らいで、<sup>20)</sup> 彼らは翌日に仮釈放されるが、プラタブガルで裁判にかけられることになり、周辺の村では大騒ぎになる。

役人や警官を原告に回した勝目のなさそうな裁判で、ララーたちが無罪放免されたのは、ティワリの巧みな弁護術と、裁判所に詰めかけた民衆の圧力を恐れたイギリス人裁判長バクルが公平無私な態度で審議に臨んだからである。しかしそれ以上に、協同組合銀行の不正を暴いたミトゥの勇気を振り絞った証言は判決を左右した。原告側にとっては「虫けら」同然のミトゥが、イギリス人裁判官を前にして発言することは驚異で、自分たちの暴力ばかりではなく、犯罪行為や不正経理までも暴くとは想像できなかった：

「…ある日、私の家で預かっていた鍵のかかった金庫が、壁に穴をあけた泥棒に盗まれました。私はその金庫の鍵は持っていませんでした。地主の息子は怒って、私がこの泥棒の共犯だと告訴しました。でも皆がお上を拝みたおして、私は放免されました。それでも金庫に入っていたという金額の金を弁償するために、自分の土地や家は売りました…それからお偉方は、私に隣の村まで長官の荷物を運べと強制したんです…これが正義ですか、裁判長様？」

20) 物語で農民運動に同情的で左遷されるメーターは、ラムチャンドラに農民問題の調査を依頼した副長官 V.N. Mehta をモデルにしている。パーンデー、前掲書110-111頁参照。

「帳簿には、金庫にいくら金があると書いてあったのかね」とティワリは尋ねた。

「弁護士様、お偉方は、会計の私に帳簿は渡しませんでした。それが、地主の事務所に保管されているからです——お偉方は、封印するためだけに箱を私によこしました！」とミトゥは法廷をびっくり仰天させるような無骨な勇気を振り絞って言った…

「帳簿を不正に取り扱うことはありませんでした、裁判長様。なぜなら帳簿を扱うなんて仕事はなかったんです」とミトゥは、頑固に真実を述べた…

「しかし、もし君がこの不正を知ったとするなら、なぜ警察やもっと階級の高い地方の役人に報告しなかったのかね」とバクル裁判長は、ゆっくりとしたヒンドゥー語で尋ねた…

「協同組合銀行の監督官は、みんなとても偉い方たちです」とティワリに弁護されたミトゥは力を振り絞って言った。「貧乏人に一体何ができるって言うんですか。」(286-88)

協同組合銀行は、借地人から地主が借金を割増して返済させるための組織であり、警察や上級の役所がその不正を黙認しているというミトゥの訴えに、裁判長のバクルは「傍聴人」になったような気分で、事件の全貌に興味を覚える。被告人を支援して裁判を傍聴に来た民衆の叫び声や興奮ぶりからも、ミトゥの証言には信憑性が感じられた。しかし、それが真実であるにしても、「大英帝国の威光」の下に「警察やその他の役人たちがいつも民衆の苦難を除くためにある」(288)と信じるバクルは、当局が絡んだ一連の事件を局地的な例外として受け止め、起訴を取り下げる。一方、民衆たちはミトゥの証言に溜飲の下がる思いがして、無罪放免を勝ち取ったララーたちに喝采を浴びせる。釈放された「同志」たちも、自分たちの活動が正当化されたような思いがして、「革命」運動の推進を再開する。

## VIII

裁判に勝利したララーたちの呼びかけに応じ、小作人たちは組合活動に興味を抱くようになるが、彼らの多くは急進化して集会に出向くために無賃乗車を恐れないようになり、駅員のみならず「同志」たちも驚かす。そのような小作人たちが求めるものは一様ではなく、ラグフのように地主制度を擁護するガンディーが「国王」になることを願う者もあれば、マドフのように耕作農民が政権を握る「革命」を期待する小作人もあった。組合組織は必ずしも一枚岩ではなく、「同志」たちの思惑も、それぞれの信仰やカーストの相違によって微妙に異なっていた。こうした違いは、彼らがミトゥに倣って自己主張することによって明らかになる。実際に、一口に「農民」と言っても、中には信仰の厚いバラモンもいれば、地主の田畑で野宿する不可触民、イスラム教徒の小作人もあった。「キサン・ナガル」にとっては皮肉なことに、自意識に目覚めた彼らの異なる主義主張は仲間割れをもたらし、団体活動を阻むようにもなる。それは、ネルーの邸宅で、不可触民と同席して食事をするようにガンディーが勧めても、マドフやラグフが、ご馳走に手をつけないことから窺い知れる。そんな彼らに、農業労働者の多くを占める不可触民をキサン・ナガルに呼び込めるとは思えない。また、同じヒンドゥー教徒であってもラグフの蛇神信仰は、スクハにとっては嘲笑の種で、創世物語をめぐる二人は大喧嘩になる。さらに、スクハは、イギリスの帝国支配を崇めるような発言をするブペンドラに激怒し、彼を突き飛ばして死なせてしまう。その過失致死行為に対して、世間体を気にするランバル・シンはブペンドラが高齢だったこともあり、不問



に付すことにした。そんな秩序や正義感を失った「共産主義者の法廷」や「革命」の遅延に嫌気がさしたグプタは、少年のサンガルを誘ってビルパル・シンの使用人になり、活動から身をひく。娘の持参金が必要なグプタには、先行きの見えない「革命」よりも定期的に手にできる給料のほうが魅力的だった。サンガルには、「革命」を延々と説く指導者たちが「乳白色のベッドで眠り暖かいお茶を飲む間に、彼らの約束を信じる者たちがいつも警棒の攻撃に耐えなくてはならない」(309) ことが馬鹿馬鹿しく思えた。一方で「革命」に固執するスクハは、サンガルに怒って彼と口論の末、取っ組み合いの大喧嘩をする。その騒ぎを聞きつけたビルパル・シンは、スクハに「盲目のうすのろ！ お前は身のほどを忘れたのか、馬鹿め！ サンガルを離せ」という罵倒を浴びせながら二人を引き離そうとする。その言葉に怒り、積もりに積もった不満を爆発させたスクハは、相手が自分を保護したランパル・シンの弟であるにもかかわらず、彼をやり飛ばしてしまう。小作人からの暴力に激昂したビルパルは、スクハを蹴飛ばして応戦するが、さらなる攻撃と罵倒を彼から浴びせられて面目を失う：

スクハは、やっとのことで立ち上がり、魔術師のように支配人ビルパルの脚を素早くつかんで彼を倒し、手に持っていた水ギセルの柄で彼を殴った。

「古い時代は過ぎた！... 女たらし！ お前が他人の女房を襲うなら、どうなるか教えてやるぞ！」と彼は言い続けた...

ラグフとマドフ、サンガルは、大騒動に気づいたランパル・シン、ヴァルマ教授、ラー・シン、ラズウィがその場に駆けつける間に、スクハに馬乗りになられた支配人のビルパルを助け出そうと、必死になった...

カンワル・ビルパル・シンは、身分に不釣り合いな自分が作った恥ずかしい光景に怒りながら身なりを整え、下を向いて罵りの言葉をつぶやいた。「こんなことをしてどうなるか、思い知らせてやるからな！ 犬どもめ！」(310)

スクハが何度もビルパルに殴りかかるのは、タルクダール制度に対する怒りが爆発したばかりではなく、ラーの妻を誘惑するような色好みのビルパルの放蕩ぶりが個人的に許せなかったからでもある。それを知るヒンドゥー教徒やシーク教徒の「同志」たちにとって、ビルパルに対するスクハの暴力は懲罰的な意味をもっているとも言える。しかし、「暴力」を嫌うヴァルマ教授は、スクハの乱闘ぶりに衝撃を受け、「革命」のために集まる小作人の暴徒化を懸念し、目的のために手段を選ばないようなランパル・シンの「革命」闘争にも疑問を投げかけるようになる。ラーにしても、集会に集まる小作人に革命に必要な「勇気」や「自立心」が足りないことや、ブベンドラやラグフのように無知蒙昧な「同志」の存在に不安を隠し切れなくなる。「『革命』が何をもたらすのか」というミスラからの質問には、彼自身が答えることもできないばかりか、かき集めた小作人たちをどのように導くべきかもわからない。リーダーのランパル・シンも「剣でイギリスがインドを獲得したなら、剣で奪い返す」と宣言してヴァルマ教授から批判される一方で、過激派の学生運動家ラズウィには、「剣を使うことを説くことは、イギリスの保守主義者の卑劣さと俗悪さに屈することだ... 小作人たちを印象づける目的で、テロリズムを喚起することは、ダイアー将軍がしたことと同じだ」(313) と暴力を否定する。二面的な彼の見解は、ガンディーを批判しつつもその「非暴力」の教えにランパル・シン、即ち作者自身が感化されていたことを示唆するものであろうか。

それはラルーが大地主を殺害して土地を獲得する幻想に酔いしれつつも、それを「恐ろしい罪」だと感じる心情にも通底している。そのような多くの問題や矛盾を抱える一連の「同志」の活動について、肝いりの共産党員サルシャは、次のようにラルーに述べる：

君たちには、ただ棍棒を拾い上げ、スローガンを叫びながら「革命」に向かって行進することはできない。もしそんな方法を選んだら、ただ警察の武器の中へ歩いて行くだけのことになるよ。カンパル・ランパル・シン軍団の力量で、最もよく組織化されて根付いた帝国主義に敵意をむき出しにすることはできない。他の地域の仲間と連携することもなければ、労働者を長期に渡る不屈の闘争のために組織化して教化もせず、彼らを鍛え上げるための体系的で念入りに考案した計画もなく、そんなことは不可能だよ。同志のレーニンが、君たちのような原始的な闘争を病気だと呼んだ。我々の国インドでは、それは疫病だよ。(339)

サルシャから、「同志」たちとの活動を「原始的な闘争」と見なされ「疫病」呼ばわりされたラルーは、彼に怒りを覚える。しかし、ランパル・シンが警察の命令によってラージュガルから立ち退いて監視の目の行き届く「キサン・ナガル」に幽閉されるという事態に遭遇し、「革命」を弾圧する政府の絶大な権力を改めて認識する。サルシャの指摘どおり、「同志」たちは連合州内の他地域の農民活動に注目することもなければ、秩序や規律のある組織を作れなかった。彼らはスローガンを叫んで、小さな「コンミュン」の「キサン・ナガル」を作り上げても、集まる小作人たちに「革命」に必要な十分な「教化」を施さなかった。そのため「同志」たちは仲間割れをするようになって、ビルパル・シンを怒らせ、領地内の無秩序を恐れた彼の訴えを契機に、当局が組合潰しに動くことになる。それだけならまだしも、幽閉状態に我慢できなくなったランパル・シンは、命令の取り下げを求めてラーエ・バレイリに向き、当地でラム・ディン、ラズウィと共に当局の命令に違反した容疑で逮捕され監獄に入れられてしまう。事の重大さに狼狽したラルーは、逮捕される危険を省みず、単身でラーエ・バレイリに向かい、監獄に近づくために立ち入り禁止区域にさしかかり、合流したキサン・ナガルの「同志」たちや小作人たちと共に、軍隊から銃撃を受ける。ラーエ・バレイリでは、農民運動が想像以上に大規模かつ熾烈で、政府は警察のみならず軍隊も配置して運動員たちを徹底的に弾圧していた。実際に農民を説得するために、駆けつけたネルーも発砲騒ぎに驚くばかりで、なす術がなかったほどであった。<sup>21)</sup> 丸腰だったラルーは、死傷者が出るのを恐れ、逃亡することをあきらめて捕縛され、監獄に入れられることになる。そこで彼は自らの人生を振り返り、自分たちの「革命」が失敗した原因は、サルシャの指摘どおりだったと反省するが、絶望することなく再び立ち上がることを夢見る：

我々は、自分たちの慣習や観念、意見が偏狭で、「キサン・ナガル」の周辺にこもって自らを変化させなかったので挫折した。同胞たちが——飢餓や長時間の寒さや泥、病気、疫病から逃れるためにインド各地の工場や紡績工場に行き着いた同胞たちが——何をしているのか、「革命」の指導者も自分たちも知らなかったから失敗した…

私たちの信仰の「あなたのお役に立つように」という宗教的理念を実践した昔の献身者バガット (*bhagat*) のように、自らを捧げよう。なぜなら、他人へ奉仕する者は祝福され、心豊かになるから

21) ネルーの訪問を含め、ラーエ・バレイリで活動家の釈放をめぐる農民軍団と警察、軍隊が衝突し、死傷者が出た事件は史実に基づいている。ネルー、前掲書、81-82頁参照。

だ…

そして身を捧げること、他人のために献身することを決意したら、信仰にまつわる虚偽を消滅させ、人と人を隔てる偏狭の壁を崩すために、自らを支配し、一族やカーストのエゴイズムを放棄することを学ばなければならない…

なぜなら、「革命」には団結が必要だからだ、「同志」たちよ。人々の間に生まれる敵意を抑制し、兄弟として共に立ち上がることが「革命」には必要だ。(367)

## おわりに

ラーや「同志」たちが監獄に入れられ、彼らの推進する「革命」が挫折するという『剣と鎌』の結末は、1920年代初頭の連合州各地の農民運動が弾圧されて、彼らの要求が却下された歴史的事件を忠実に反映している。ネルーを驚かせたこの運動がインド独立史の中であまり詳細に語られていないのは、その歴史的意義があまり認められないためか、あるいは活動を阻止したガンディーや国民会議派のイメージが損なわれる故であろうか。それはともかく三部作を執筆していた当時、アーナンドは農民の死活問題を軽視して進める国民会議派の民族独立運動が、イギリス政権を打倒した後に何をもたらすのか不安であった。そのために、あえて三部作の最終作で主人公を連合州の農民運動に関与させ、彼の目を通して様々な人々の主義・主張をいかに受け止めるべきか、読者に投げかけたのであろう。この作品に対して様々な批評があるのは、読者のインドの民族独立運動に対する見解や、立ち位置の違いによるものであろう。農民運動に関与した読者には、主人公が関わる活動のスケールが小さく、彼が集めた小作人たちと権力者側の闘争ぶりにも、凄まじさが足りないように感じられたに違いない。しかし、文盲の小作人たちが物語を口承で伝えられたなら、彼らは乞食になった小作人、スクハやミトゥたちが自分たちの思いを伝えたり、友愛に燃えて死を覚悟で権力者に立ち向かうくだりに共感して感動したであろう。一方で、ガンディー主義者の読者たちからは、この作品が究極的には「暴力」革命の限界を伝える作品として評価されたかもしれない。また、イギリスの読者たちは「同志」や農民たちの矛先が具体的には自分たちの同胞というよりは、むしろインド人の大地主に向けられているので、小作人たちの窮乏やイギリスが作り出した地主制度にあまり責任を感じなかったであろう。それにしても彼らは、何事も前世の因縁だとあきらめ、権力者の圧制にも甘んじると伝えられてきたインドの農民が大地主や役人を告発したり、リーダーを失っても自分たちで仲間を集め帝国政府が管轄する裁判所や監獄を取り囲むという物語の展開に脅威を感じ、イギリスがもはやインドを治められないことをあらためて認識したのではないだろうか。そのような感想は、物語の終幕において子供が誕生したニュースに気を取り直したラーが、クリシュナに励まされて迷いを捨てたアルジュナのごとく、「正義の戦い」に立ち向かう気になった語りによって深められたに違いない。1930年代以降、インド各地に広がった農民運動は、会議派の運動につかず離れずの状態ですべてのインドの独立に協力し、ザミンダール制度の廃止や小作法の改正を勝ち取った。しかし、独立後も多数の農民が小作人や農業労働者として貧困にあえいでいる現実を考えると、アーナンドがあらたな「革命」を、ラーの子孫や「同志」が受け継ぐことを期待したのも、その先見の明によると言える。

## 【参考文献】

- Alliluyeva, Svetlana. *Only One Year* (New York: Harper & Row, 1969).
- Anand, Mulk Raj. *Across the Black Water* (Delhi: Orient Papers, 2008).
- Anand, Mulk Raj. *Apology for Heroism: An Essay in Search of Faith* (London: Lindsay Drummond, 1946).
- Anand, Mulk Raj. *The Sword and the Sickle* (London: Jonathan Cape, 1942).
- Anand, Mulk Raj. *The Village* (London: Jonathan Cape, 1939).
- Anand, Mulk Raj. “Anglo-Indian Literature” in *Life and Letters To-Day*, Vol. 15, No. 5 (Autumn, 1936).
- Cowasjee, Saros. *So Many Freedoms: A Study of the Major Fiction of Mulk Raj Anand* (Delhi: Oxford UP, 1977).
- Gautam, G.L. *Mulk Raj Anand's Critique of Religious Fundamentalism: A Critical Assessment of His Novels* (Delhi: Kanti Publications, 1996).
- George, C.L. *Mulk Raj Anand: His Art and Concerns* (New Delhi: Atlantic, 2000).
- Jha, Rama. *Gandhian Thought and Indo-Anglian Novelists* (New Delhi: Heritage, 1979).
- Kumar, Kapil. *Peasants in Revolt; Tenants, Landlords, Congress and the Raj in Oudh* (New Delhi: Manohar, 1984).
- Naik, M.K. *Mulk Raj Anand* (New Delhi: Arnold-Heinemann, 1973).
- Patil, V.T. *Gandhism and Indian English Fiction: “The Sword and the Sickle”, “Kanthapura”, and “Waiting for the Mahatma”* (Delhi: Devika, 2002).
- Prasad, Shaileshwar Sati. *The Injured and the Insulted: Untouchables, Coolies and Peasants in the Novels of Mulk Raj Anand* (Patna: Janaki Prakashan, 1997).
- Rajan, P.K. *Studies in Mulk Raj Anand* (New Delhi: Abhinav Publications, 1986).
- Sareen, Tilak Raj. *Indian Revolutionary Movement Abroad, 1905–1921* (New Delhi: Sterling, 1979).
- Sinha, Krishna Nandan. *Mulk Raj Anand* (New York: Twayne, 1972).
- VanKoski, Susan Christina. *The Indian Ex-Soldier from the Eve of the First World War to Independence and Partition: A Study of Provisions for Ex-Soldier and Ex-Soldiers' Role in Indian National Life* (Ann Arbor, MI: UMI, 1996).
- 石田保昭『不服従の思想——ガンジーをどうのりこえるか』(講談社, 1970年).
- 坂本徳松『現代インドの政治と社会』(法政大学出版, 1969年).
- チャンドラ, ビバン著, 粟屋利江訳『近代インドの歴史』(山川出版社, 2001年).
- ヘイコックス, J.P.著, 中村平治・内藤雅雄訳『インドの共産主義と民族主義——M.N. ローイとコミンテルン』(岩波書店, 1986年).
- ネール, ジャワハルラル著, 磯野勇三訳『ネール自傳』I (立明社, 1961年).
- 山本達郎編『インド史』第3版 (山川出版社, 1972年).
- パーンデー, ギャーネンドラ「インド・ナショナリズムと農民反乱——アウド農民運動, 1919–1922年」  
R. グハ〔他〕著, 竹中千春訳『サバルタンの歴史——インド史の脱構築』(岩波書店, 1998年).